

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520030

研究課題名(和文)現象学的倫理学としてのミュンヘン・ゲッティンゲン学派の研究

研究課題名(英文)The Study of the Munich-Goettingen School as Phenomenological Ethics

研究代表者

吉川 孝 (YOSHIKAWA, Takashi)

高知県立大学・文化学部・准教授

研究者番号：20453219

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトは、現代哲学の文脈においてあまり注目されて来なかったミュンヘン・ゲッティンゲン学派のなかに、現象学的倫理学としてのいくつかの可能性を読み取っている。現象学的倫理学が、20世紀の後半から注目されている「徳倫理」や「ケアの倫理」と同じように、人間の生き方を探求することのできる倫理学であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research project has found out some possibilities of the phenomenological ethics in the Munich-Goettingen school which has been neglected in contemporary philosophical context. It was revealed that the phenomenological ethics can search for the way of personal life and is compared with "virtue ethics" and "ethic of care" which came into the spotlight in the second half of the 20th century.

研究分野：哲学・倫理学

科研費の分科・細目：倫理学

キーワード：哲学 倫理学 現象学 共感 責任 行為 感情 理性

1. 研究開始当初の背景

(1) ミュンヘン・ゲッティンゲン学派は、現象学運動(H. シュピーゲルバーグ)のなかで、大きな役割を果たしてきた。にもかかわらず、これまではフッサールに対する周辺の地位が割り当てられるだけであり、哲学・倫理学として主題的関心が向けられることはほとんどなかった。現象学の主流は、フッサールから、M. ハイデガー、M. メルロ＝ポンティへと連なる系譜と見なされている。

(2) ところが、20世紀の哲学の一大潮流を形成した現象学全体が、英米系の分析哲学の盛隆とともに、かつての影響力を失いつつある。こうした状況において、これまで傍流視されてきたミュンヘン・ゲッティンゲン学派に眼を向けることは、現象学運動全体の意味を再検討することになる。同学派の哲学・倫理学は、個別的な事象の解明として極めて明晰かつ論理的であり、フッサール以後の現象学の欠陥でもある思弁的性格を免れている。ミュンヘン・ゲッティンゲン学派を再検討することは、現象学と英米の分析哲学との対話の可能性を見いだすことにもつながるだろう。

2. 研究の目的

(1) 現象学派の倫理学としては、F. ブレンターノや M. シェーラーの名が知られている。しかし、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派の全体像や倫理学としての可能性は明らかにされていない。したがって、本研究は、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派をも含めた現象学の全体像を明確にすることになる。

(2) 本研究は、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派を、現象学的倫理学という観点から考察する。そうすることで、現象学のもつてい

る倫理学としての可能性を明らかにする。とりわけ、他の倫理学説のなかでなされている議論を踏まえることで、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派を中心とする現象学的倫理学の現代的意義を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、倫理学の文献研究として遂行した。ブレンターノに始まりシェーラーによって展開された現象学的倫理学のなかで、この学派の倫理思想がどのように成立したのかを明らかにした。

(2) さらには、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派の倫理学の解明にあたって、いくつかのトピックを選定することで、研究に一定の方向性をもたせた。とりわけ、共感、責任、意志、感情などのトピックがここでの主題となった。

(3) 単なる文献研究としての価値だけではなく、哲学研究としての価値も獲得するために、現代哲学でも議論されている哲学や倫理学の議論に何らかの形で参与することを目指した。現代の行為論における諸問題(責任、意図、動機づけなど)を念頭において、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派を研究することで、哲学研究としての価値を高めるよう心がけた。

4. 研究成果

(1) 平成23年度は、著作『フッサールの倫理学 生き方の探求』(知泉書館)を公刊することができた。この著作は、フッサールの現象学のなかに、現象学的倫理学の可能性を読み取り、その現代的意義を明らかにするものである。フッサールは、ブレンターノやドイツ観念論(カント、フィヒテ)の影響のもとで、実践理性の学問としての倫理学を形成している。しかも、そうした形成過程におい

て、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派との交流から大きな影響を受けている。そのため、シェーラー、A. プフェンダー、A. ライナツハ、D. フォン・ヒルデブランド、J. ダウベルトなどを扱った章をもうけている。彼らによって、行為、意志、感情などのトピックがどのように扱われているかを明らかにした。本書は、日本倫理学会より、2012 年度和辻賞（著作部門）を受賞した。さらには、立命館大学の間文化現象学における「共存」をテーマとするシンポジウムにおいて、シェーラーの共感論をケアの倫理と関連づける発表を行った。

（2）平成24年度は、著書『生きることに責任はあるのか 現象学的倫理学の試み』（弘前大学出版会、共編著）を公刊することができた。この著作は、現象学的倫理学の立場から、責任と生とをめぐり思考の可能性を探った論集になっている。現象学的倫理学の系譜のなかに見いだされる倫理的思考の可能性を明らかにするため、責任というトピックをめぐって、独仏の現象学者（フッサール、シェーラー、メルロ＝ポンティ、ハイデガー、E. レヴィナス）と日本の哲学者（西田幾多郎、田辺元、和辻哲郎、九鬼周造、三木清）とを比較考察している。吉川は編者として全体の企画に関わったほか、第1章の「ケアする存在の自己責任 フッサールの『改造』論文における「革新」の倫理学」、第7章「世界・国家・懺悔 田辺哲学の現象学的解釈」、終章「いまなぜ現象学的倫理学なのか？」を担当している。さらには、日本現象学会においては、「使命感と合理性——フッサールにおけるアイデンティティの倫理学」を発表した。これらの成果において明らかになったのは、現象学的倫理学は、本質考察や解釈学的方法によって、感情のなかに合理性を見いだすという共通点をもっており、さらには、単独の行為の是非や道徳的判断の正当性を正面からとり

あげるというよりも、行為する者やその生き方の様式を問うことのできる倫理学であり、20世紀の後半になって注目を集めた「徳倫理」や「ケアの倫理」に通じる可能性をもっていることである。

（3）平成25年度は、フッサールやシェーラーにかかわる論文3本（「使命感と合理性——フッサールにおけるアイデンティティの倫理学」『現象学年報』、「共感と合理性——パーソン論に対してフッサールとシェーラーの倫理学は何をなしうるか？——」『多極化する現象学の新世代組織形成と連動した「間文化現象学」の研究』、「共感の道徳的価値をめぐって：M.シェーラーにおける「ケアの倫理」の可能性」『行為論研究』）を発表したほか、現象学的倫理学の可能性を論じる口頭発表を6回（「パーソンと生き方の問い フッサールとシェーラーの「人格に根ざす倫理学」」日本哲学会、「生き方、ケア、合理性——フッサール倫理学の現代的意義——」フッサール研究会・大阪大学臨床哲学研究会、「物語、生き方、真理——ナラティブ・アプローチの可能性」高知女子大学看護学会、「アクラシアの現象学——実践的合理性を再考する」日本現象学会、等）行うことができた。これらは、本研究の集大成と位置づけられるものである。日本哲学会、日本現象学会、高知女子大学看護学会などでは、ワークショップやシンポジウムでの発表となっている。そうした場では、現象学的倫理学の意義を、狭義での専門外の研究者に向けて発信することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

吉川孝、アクラシアの現象学 実践的合理性を再考する（仮）、現象学年報、査読無、30巻、2014（掲載決定）
吉川孝、共感の道徳的価値をめぐって：M.シェーラーにおける「ケアの倫理」の可能性、行為論研究、査読無、3巻、2014、37-50

吉川孝、共感と合理性 パーソン論に対してフッサールとシェーラーの倫理学は何をなしうるか？、多極化する現象学の新世代組織形成と連動した「間文化現象学」の研究、査読無、1巻、2013、143-152

吉川孝、使命感と合理性 フッサールにおけるアイデンティティの倫理学、現象学年報、査読有、29巻、2013、167-174

〔学会発表〕(計8件)

吉川孝、意志から愛へ 行為の観点から見たフッサール倫理学の発展、研究会「フッサールの行為論」、2013年12月20日、立正大学

吉川孝、アクラシアの現象学 実践的合理性を再考する、日本現象学会、2013年11月9日、名古屋大学

吉川孝、アクラシアと責任 現象学的アプローチ、行為論研究報告会、2013年9月13日、新潟大学

吉川孝、生き方、ケア、合理性 フッサール倫理学の現代的意義、フッサール研究会特別企画・大阪大学臨床哲学研究会共催シンポジウム、2013年7月27日、大阪大学

吉川孝、物語、生き方、真理 ナラティブ・アプローチの可能性、第39回高知女子大学看護学会、2013年7月20日、高知県立大学

吉川孝、パーソンと生き方の問い フッサールとシェーラーの「人格に根ざす倫理学」、日本哲学会、2013年5月12日、お茶の水女子大学

吉川孝、使命感と合理性 フッサールにおけるアイデンティティの倫理学、日本現象学会、2012年11月2日、東北大学

吉川孝、共感と価値 M.シェーラーにおけるケアの倫理、間文化現象学ワークショップ、2012年3月10日、立命館大学

〔図書〕(計2件)

吉川孝 他、弘前大学出版会、生きることと責任はあるのか、2012、305

吉川孝、知泉書館、フッサールの倫理学 生き方の探求、2011、262

〔その他〕

2012年度和辻賞(著作部門)受賞、日本倫理学会

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉川 孝 (YOSHIKAWA, Takashi)

高知県立大学・文化学部・准教授

研究者番号：20453219